





赤色立体地図で飯盛城跡を読み解く

■飯盛城跡北部の遺構（四條畷市域）

航空レーザー測量で赤色立体地図を作成したことにより、これまで飯盛城の地形の高低差を平面地図の等高線から判断していたものが、あらゆる角度の側面から観察できるようになり、飯盛城跡の北側に位置する御体塙と呼ばれている曲輪が、その周囲より一段高いのところに位置しているといった地形の状況がよりリアルに誰にでも確認することができた。

またそれらの図面から、従来の踏査による網張り測量図では分からなかった土塁なども確認でき、四條畷市域の範囲では、飯盛山頂から東へ派生する尾根上に点在する小さな曲輪の先端部分において、新たな曲輪ではないかともおもわれる地面を平らに削った場所（削平地）を確認した。その場所は、当時の飯盛城への登城道の一つと考えられている篠原川沿いの道に接続するところに位置するため、そこを監視するには好

都合の場所にある。

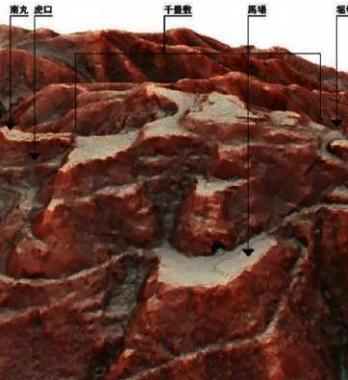
そして飯盛城の範囲外ではあるが、その北東に位置する飯盛城の付随施設と考えられている茶臼山跡（現在の龍尾寺）やその周辺にも削平地が確認できた。

今後これららの削平地については、飯盛城に関連するものであるのかを含めて、いつの時代に削平されたものであるのかを検証するため、実際に現地に赴いて確認していく必要がある。そしてこれがが当時の遺構であると判断されれば、登城道をその両側から堅固に守備するための施設として、飯盛城の付体塙を解明する手がかりの一つとなると思われる。

また、個別に実施している石垣調査のデータをこの立体地図に反映していくことも今後の課題である。（村上 始）

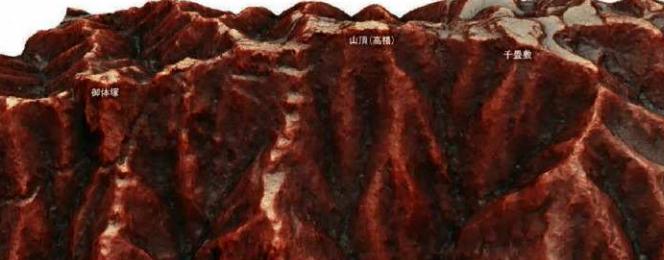


●飯盛城跡全城を北側から望む。南北の削平地に曲輪群が遺る。



●飯盛城跡全城を東側から望む。左より虎口、千葉敷（その下に馬場）、堀切を挟んで山頂・虎口・御体塙が連なる。その下には城造（曲輪）が各曲輪をつなぐ。

■飯盛山頂から千葉敷一帯の遺構（大東市域）



●飯盛山頂から千葉敷一帯の遺構（大東市域）

レーザー測量によって作成された赤色立体地図により、今まで見えていなかった新たな曲輪の存在が見えてきた。

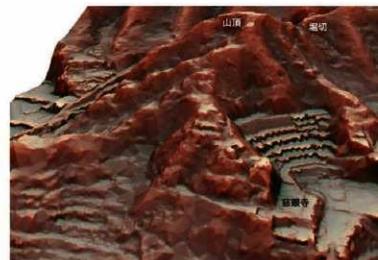
飯盛城にはこれまで大小 70 近い曲輪がある（『大東市史』）とされていたが、今回の測量で、候補も含め約 90 近い曲輪が存在することが判明した。この地図からは東西に伸びる尾根上に連続して設けられた曲輪群のその先にも、曲輪と推定される平坦地が存在することが読み取れ、これらが曲輪と認定されれば、城域の範囲が拡大することになり、史跡の指定範

囲にも大きく関係してくることになる。

また、南北の稜線上にある主要な曲輪とそれに附属する帶曲輪も明確に見えている。このうち展望台や木工正行像がある頂上の曲輪等、比較的広い曲輪の多くは大東市側に存在し、特に FM 送信所がある場所を頂点に、3 度で構成されている曲輪は、城中最大の面積を誇り、「千葉敷」と称されている。ここに城郭施設の中でも居住施設が設けられていた可能性が高いため、トレンチによる確認調査を順次実施しており、礎石に使用されたと想われる石や堀切と推定される溝を確認している。

また、通常は草で覆われ、確認が困難な堅壘も見えてきた。これもレーザー測量ならではの成果である。

このように赤色立体地図では地形が正確に表現され、曲輪の形状や輪郭が明確になったが、従来の縄張図のものと異なっているため、整合性を図っていく必要がある。今後は赤色立体地図により判明した情報を精査し、現地踏査を実施して検証していくことが必要である。



●野崎城跡全城を西側から望む。階段式に曲輪が連なる。右下は野崎觀音・草原寺。

■野崎城跡の構造が明らかに

飯盛城の出城とされる野崎城は、飯盛山からの尾根が平野部に最も突き出している丘陵上にあり、眼下の東高野街道を掌握するのに絶好の位置にあった。

これまで本朝西側の尾根斜面に 3段 4つの曲輪で構成されると考えられていたが、赤色立体地図を見る限り、構造はそう単純なものではなく、多くの曲輪で構成されているように推定される。また、城域についても従来の南北 200m 東西 180m から広がる可能性が出てきた。現地での確認が必要であるが、これも赤色立体地図ならではの成果といえよう。（黒田淳）



●野崎城跡全城を東側から望む。左下に見える東側の堀切が特徴的。

